

おまかせの惨事

はじめみっや
端占美也

朝起きて一番につけたテレビニュースで、エミ子がヒデキの店で死んだことを知った。昨夜遅くの出来事だったらしい。突然激しく嘔吐し、救急車で搬送されたが助からなかったのだという。死因についての説明はなかった。

もう、ずいぶんと昔のことになるが、私たち三人は大学の同級生で、たがいに気の置けない仲間だった。特に私とエミ子とは、かつては相当に親密な間柄だったが、彼女が某省庁の官僚だという男のもとへ去って以来、もう十年以上も会っていない。以前の私は、彼女の愁いをおびた表情や、小さくて形のよい顎先、繊細な白い喉元に胸をときめかせたものだが、きつと、そんな容貌もすっかりと変わってしまったことだろう。どんな経緯があったか知らないが、結局、彼女とその官僚との仲も、数年と続かずに終わりを告げたらしい。

そんなことまで、なぜ知っているのかといえば、実は、私も昨晩はヒデキの店にいて、不承不承ながら彼の物語に付き合わされたからだ。男と別れたあとのエミ子は、時たま、思い出したようにヒデキのところに姿を見せ、男と女を意識しない友人同士の付き合いが続いていたらしい。

——しかし昨晩は、私は、エミ子がやってくる前に帰ったので、店で顔を合わせる機会はなかった。出来すぎた話に聞こえるかもしれないが、朝のニュースで彼女の死を知ったというのも、十数年前に別れて以来、彼女と再会していないというのも、それぞれ、まごうかたない真実なのだ。

一体、私が帰ったあとで何が起きたのだろうか？

ヒデキの店を訪れたのは昨日が最初だった。

都心から離れた郊外の乗換駅の近くで、カウンターだけで八人も座れば満席という細長でちっぽけな居酒屋——『恵美子』などと、心穏やかでない女の名前をあてつけがましく店名にしているのを見たときには、よほどそのまま帰ろうかと思った。何せ、このヒデキこそが、学生時代の友情を踏みにしつて、密かにエミ子と例の官僚との間を仲立ちした二人目の裏切り者だったのだから。

「たまには男同士だけで羽目はずそう」

そんなふうには誘われて、私が遊び呆けている間に、彼から安全な日知らされたエミ子が、せつせと、将来性ありと値踏みした新しい男と交流を深めていた。そして、私が男同士の気のゆるみで無防備に重ねてしまった数々の愚行は、悉くその官僚に伝えられ、そいつが恵美子の歓心を買うために貴重な情報として使われたのだ。ヒデキはコソコソと隠れてやったつもりだろうが、私はずっと気づいていたし、彼もじきにそのことに思い当たったのであるう、ある時を境にしてフツツリと音信が途絶えてしまった。先日、突然に彼から、会社勤めを辞めて自分の店を持ったので来てくれと誘われた時には、この男はどういう神経を持ち合わせているのだろうか、その真意を測りかねたものだ。

より詳しい情報が出ていないかと新聞を開いてみたが、まだ記事になっていなかった。落ち着かない気分で、次のニュースの時間を調べたりしているうちに、玄関のベルが鳴った。

扉を開けると、ひと目で刑事だと分かる風采の男が立っていた。

「あなたのご友人が亡くなった件で、少しお訊きしたいのです」

予期せぬ訪問にすっかりと慌ててしまった。九時をまわったばかりで、寝坊した私はまだ朝食の支度すら始めていなかった。

「ご存じないかもしれませんが――」

刑事が意味ありげに言葉を切ったので、どのように反応したものか判断しかねて「テレビで見ましたが……食中毒か何かで？」とだけ答えた。

「いえ、毒を飲んだのです。実は殺人事件だと考えています」

警察というものが、それほどにハッキリと手の内を明かして来るのだとは知らなかった。それに、この職業は常に二人一組で行動するのだとばかり思っていたが、他には連れもない様子だ。

「失礼ですがお仕事は？」

「今日は休みで――ああ、なるほど、私は薬剤師だ。それで疑われているわけですね？」

「とんでもありません」刑事は屈託のない笑顔を見せた。

「事件は、あなたが帰ったあとで起きたのですから。エミ子さんが苦しみ始めたとき、店にいたのはオーナーのヒデキさんと、アルバイトの店員、それからエミ子さんとは面識のない別の客が一人だけでした。その客が、エミ子さんと入れ違いに帰った人のことを話してくれましてね。ヒデキさんに確認したら、エミ子さんと共通の友人だということで、何か話が聞けるのではないかと考えて来たのです」

刑事は、そうすれば私が警戒せずに気を許すとも考えたのか、わざわざ二人のことをヒデキさん、エミ子さんと馴れ馴れしく名前と呼んだ。見当はずれもいいところで、かえって全身がむずがゆくて妙な気分だった。

「余計なことを話す御仁ですな……。で、何を知りたいのです？」

「エミ子さん、ヒデキさんとは親しいお友だちですね？」

「とんでもない。エミ子は十数年前に私を捨てた憎い女です。ヒデキはそのとき私を裏切って彼女を助けた許しがたい男です。二人とも、殺しても飽き足りないくらいですよ」

刑事は目をぱちくりさせた。

私も、さすがにこれでは説明不足だと思い直して、学生時代の出会いからその後の破綻に至るまでの経緯を、簡単に話してやった。

「それはお辛かったですね……。でもまた、どうして昨夜は、そんな仇の店に行かれたのです？」

「彼が、新しい店を始めたので来いと、電話をよこしたのです」

「それは妙ですね。ヒデキさんだって気まずいでしょうに」

「なあに、自己中心的なやつなのでね。ひと旗あげてすっかり嬉しくなり、誰もが自分のことのように喜んでくれるはずだと思ったのでしようよ」

「で、エミ子さんも交えて三人で飲もうと？」

「いや、彼女が来ることは聞いてなかったのです。彼とカウンター越しに話していたら、実はあとでエミ子が来るんだと聞かされて、そいつは堪らん、勘弁してよと早々に退散しました」

刑事はフムフムとうなずいていた。

「そのやりとりは、あとまで残っていた例の客も覚えていて、証言してくれました。あなたが仰ったとおりの内容でした」

「意地の悪い人だ。私を試したのですね？」

「いやいや、どうやら、あなたの話は信じられそうです。それで、ヒデキさんとエミ子さんの関係はどんなでしたか？」

「男と女の友だち同士——というんですか、淡々としたもので、格別に親しくもなかったようですがね」

「ヒデキさんがエミ子さんに敵意を抱いていた、とは考えられませんか？」

質問の方向が見えてきて、ようやく私は、ホッとして余裕を取り戻すことができました。

「おやおや、それでは彼が疑われているのですか」

「アルバイト店員やもう一人の客は、エミ子さんと面識すらなく、動機がありません。ヒデキさんが殺したか、そうでなければ自殺ということですよ」

「ヒデキがエミ子をねえ……。二人とも大阪の出身で同郷意識が強かったのですが、最近のことはよく知らないのですね」

「ちよくちよくと会ってはいたようですね」

「そう言ってみましたね。でも……」

「そう言っていた——ヒデキさんがね。つまり、あなたが自分で見て、知っていたわけではないのでしょうか？」

「エミ子は、かつては、彼には心を動かされずに私を選んだのですよ」

「でも、そういう三者関係で片方と別れて、もう一方とくっつくということは、よくあるものですよ」

私はお手上げといった風情で、両腕を広げてみせた。

「二人は私が思っている以上に深い関係で、痴情のもつれがあったのではないかと言うのですね？ いいですよ。私には分からない。ただ、ヒデキが敵意を抱いていたと考えられないかと質問されたら、私としては、心当たりがないとしか答えられないです。少なくとも昨晩は、ヒデキが彼女のことを憎らしげに話す場面はなかったから……。どうせ、そのあたりのことも例の客人に確認されたのでしょうか？」

刑事は苦笑しただけで、最後の問いには答えようとしなかった。

「まあ、人を殺そうとしているその場面で、敵意をむき出しでは間抜けすぎますからね、あなたが気づかなかつたとしても、別におかしくはありませんよ。二人の関係はもう少し調べてみます。それよりも、ヒデキさんが犯人だったとしても、どうやって毒がエミ子さんの口に入ったかがはっきりとしませんでね。その方が困っているのです」

「残った皿とかグラスを調べれば、分かるのではありませんか？」

「それが、エミ子さんが救急車で運ばれたあとで、何を考えたか、ヒデキさんは残っていた皿やグラスをすべて洗ってしまったのです。エミ子さんの死亡が確認され、死因に不審

を抱いた病院からの連絡で警察が行ったときには、もう何も残っていませんでした」
「そいつは……」私は思わず口元がゆるむのを禁じ得なかった。「少々ばかな真似をしたものですね」

「でしよう？ どうみたって怪しいわけです」

「でも毒は、料理や酒には入っていないなかったかもしれませんよ」

「はて、どういう意味でしょう？」

「客用に置いてある醤油や唐辛子の容器に入っていたかも。それならば店にいなかった人物にもやれたはずですよ」

「たとえば、あなたですかね？」

「たとえば私です。狭い店で、カウンターの一方の端には別の客がいましたからね、彼女が来て座る場所はあらかじめ見当がつきます。そこで――」

私は、醤油差しのフタをとって葉を振りかけるジェスチャーをやって見せた。

「はっはっはっ、あなたは面白い人だ」

「とぼけた素ぷりでカマをかけられるのは嫌なのでね」

「いや、これは一本取られましたね。……でも、ご安心なさい。そんなことは我々だって、とうに考えました。エミ子さんは実際にカウンターの上の醤油を使ったのです。でも、客席の調味料をすべて調べてみましたが、何も出て来ませんでした」

「氷に毒を仕込んで、あとから効くようにする古典的な手口もありますが」

「あなたが店にいるうちにエミ子さんが来て、少しでも一緒に酒を飲んでいたら時間があれば可能でしょうが、完全なすれ違いではチャンスはありますまい」

「彼女は何時ごろ店に来たのですか？」

私は用心深く質問した。

「あれ、話ませんでしたっけ？」

「ええ。テレビでは、店で具合が悪くなったのが九時ごろだったように言っていましたかね。」

それ以上のことは何も」

「あなたが店を出られたのは、何時ごろだったのでしょうか？」

どうせ他の人間から聴取してあるのだろうに、いちいち空々しい話のはこびで癪にさわる男だ。

「八時半――いや、もう少し前だったかもしれません」

「エミ子さんが来たのが八時半でした。あなたは二十分ごろにお帰りになったようで、まさに、すれ違いとっていいタイミングでした」

「そのようですね」

「ヒデキさんから聞いて、エミ子さんが来る時間はご存じだったのでしよう？ それで、ぎりぎりのところでエミ子さんを避けてお帰りになった」

「今、思い出しましたよ」私はため息をついた。「予定の時間を聞いて、鉢合わせしないかとほらはらしながら、時計を見て席を立ったのでした」

「本当に間一髪だったわけですね」

だからどうだとも言わず、刑事はただにこやかに微笑んでいた。

「それだけ時間が接近していたら、私は、店では彼女と顔を合わせなくても、どこか近く

で、店に来る途中の彼女と接触できたかもしれないね。店の外で会って、別の無害な薬のように偽って毒薬を渡したのかもしれない」

「現実には、そうやって相手に受け取らせることは困難でしょうよ」

刑事は、私が次々と自虐的な仮説を弄ぶのに興ざめたのか、ふいに真顔に戻ってそう答えた。

「それに、意図的にコッソリとやらないかぎり、薬を飲もうとする動作は目立つもので、必ず周囲が気づきます。彼女がそんなことをしなかったのは確かですよ」

「ううむ、残念、私はどうあっても容疑者失格というわけですか」

「あきらめてください」刑事は気の毒そうに請け合ってくれた。「あなたのように、わざわざ先回りして自分を疑わせようとする人は珍しいですな」

「それでは、エミ子で自分で、毒であることを承知の上でコッソリと飲んだ。ヒデキが食器を洗ってしまったので痕跡は発見されなかった——それでよいではありませんか」

「ところが、使われたのはとても苦痛を伴う薬で、通常は自殺者が選んだりしない種類のものだったのです」

そう言うって刑事は、アルカロイド系のある毒物の名をあげた。もちろん私は、それが人体にどのような作用を及ぼす薬なのか、よく知っている。刑事の言うことには一理あると認めざるを得なかった。

「それに、包装の残骸も容器も見つからなかったので、エミ子さんが自分で持参したとは考えにくいのです。ですから、十中八、九、ヒデキさんによる他殺だと見ています」

私は心の中で他に可能性がないか確かめてから、身ぶりで彼に承認の意を伝えた。

「そうだとしたら、私は何をお話しすればよいのですか？ ヒデキが料理に毒を盛った。

そして、痕跡が残らないように皿やグラスを洗ってしまった。そういうことなのでしょう。

毒を飲ませた方法が不明だと仰ったが、何が問題なのか、私にはよく分かりませんね」

「ところが、それほど簡単でもないのです。せまいカウンターの内側でアルバイトが手元を見ていた瞬間も多かった。それに、ああいふ店では、料理の多くは注文を受けてから一人前ずつ作るわけではありません。仕込みの段階で作りおきしてあって、客に出す時点では加工する手間はあまり残っていないので、ヒデキさんといえども、そうそう無限にチャンスがあったわけではないのです。実際にどの料理に、どのタイミングで毒を混ぜられたかという点、いまひとつ決め手がありませんよ」

「ははあ」

「飲み物については、エミ子さんが口にしたのは生ビールと梅酒ロックだけでした。これらは全部アルバイトに任されていて、ヒデキさんには手を触れる機会がありませんでした。もちろん、ずつと早い時間にビアサーバーやボトル、氷などに細工することは容易ですが、エミ子さんに出す分を狙ってやることは不可能だった、という意味です。そこで我々は、エミ子さんが食べた料理の方を特定して、それぞれの料理がサービスされたときの作業の流れや、人の動きを明らかにすることによって、毒を混ぜたに違いない瞬間を絞り込みたいと考えています。被害者の胃の内容物は確認しますが、さらに補助的な情報としてね」

「なるほど」

「さっそくですが」と刑事はどこからともなくメモ帳を取り出した。「あの店では、最初は共通で決まった小鉢をいくつか出すようですね。あなたが食べたのと同じ料理がエミ子さ

んにも出されたはずなのですが、どんな内容だったか覚えていらっしやいますか？」

「三品ありましたね。茄子の煮びたし、大根の煮つけに枝豆を乗せたもの、それからマグロの山かけ——これは毒を混ぜやすそうです」

「内容は合っています。それらはすべて事前に出来上がっていて、アルバイトが機械的に小鉢を客に出すだけなので、ちよつと細工はできそうにありません。そのあとは個別の注文で、料理によって、同じように作りおきした完成品だったり、ヒデキさんがその場で本格的に調理したりと様々なのですが……。ヒデキさんが犯人だとすれば、自分が調理しながら毒を混ぜやすい料理を注文してもらわないと、なかなか成功はおぼつかないことになります。そこですが、ひとつお訊きたいのは、ヒデキさんから何か、本日のおすすめのようなニュアンスで、特別に勧められた料理がなかったかなのです」

「そういえば、新鮮なホタテがあるからといって、フライを注文させられましたよ」

「それそれ」と刑事は嬉しそうに両手をすりあわせた。「ヒデキさんはエミ子さんにもホタテフライを勧めたのです。そのことは彼自身が認めていますね、有力候補です。ただね——」

「なんです？」

「ただ、ひとつ困ったことにホタテフライは、例の同席の客からも同時に注文があつて、二人分を一緒に作ったようなのです。アルバイトの証言では、鍋からあげて盛りつけるまでの作業は、いとも無造作に行われたらしい。さらに、同じ皿が二つ出来上がったあと、先にアルバイトが自分の意思で片方の皿を選んで例の客に出したあとで、ヒデキさんが残った皿を取り上げて、そのままエミ子さんに出したのだそうです」

「つまり、確実にエミ子のフライに毒を入れたかは疑問だと？」

刑事はうなずいて、「それ以外に何かなかったですか？」と哀れっぽい眼差しを向けた。「特に記憶にないですねえ。第一、毒殺の都合で勧めただけの料理なんて、他の客にも同じように勧めていたとは限らないでしょう？」

「それはそうなのですが……ちなみに、串カツを勧められませんでしたか？」

「なんですって？」

「串カツですよ、ク、シ、カ、ツ。豚肉とネギを交互に串に刺して、衣をつけて油で揚げた料理のことです」

刑事は、ばか者相手のように明々白々なことを説明してくれた。

「いや、それは分かっていますが……あの店のメニューにあったかな？」

「そうなんですよ、と刑事は肩を落とした。

「メニューにはないのです。それにも拘わらず、昨夜ヒデキさんが『串カツにしろよ』と勧めたのを聞いた人がいましてね。本人はきっぱりと否定していますが、何かありそうでしょうか？」

「それも、例の客が証言したのですね？」

「そのとおりです。実はヒデキさんは、当初は淡々と串カツなど出さないし勧めもしなかったと答えていたのですが、重ねて追及しましたら、ふいに何かに思い当たったかのよう、口をつぐんでしまったのです。以後、その件については完全黙秘でお手あげです」

「そいつは妙ですね。アルバイトの人はどのように言っていますか？」

「何のことやらサツパリの様子で、串カツなんて作っていないし、そもそも竹串自体を店

では見たことがない。使っていないんじゃないか——と、まあそんな返事でした」

「竹串すらなかった……」

刑事が串カツ、串カツと繰り返すのを聞いているうちに、彼がさらに妙な連想を働かせやしまいかと心配になってきた。このままでは宜しくない。しかし、すぐに私はあることを思いついた。

「もちろん、爪楊枝は店にあったでしょうね？」

刑事は怪訝そうにうなずいた。

「ははあ……どうやら、それで分かりましたよ。刑事さん、あなたは、ヒデキとエミ子が関西出身だということに気づくべきだったのです」

「といいますと？」

「関西ではね、『串カツ』といったら東京とは別の料理を意味するのです。魚介類でも野菜でも、串に刺して衣をつけて揚げれば、みんな串カツなのです。卵やはんべんの串カツなんてのもある——もちろん、ホタテだって串カツになります。ヒデキはきつと、ホタテフライを爪楊枝で刺して食べたかどうかと勧めたんですよ。それを、関西風のジョークで『串カツにしろよ』と表現したのではないのでしょうか。その爪楊枝に何か仕掛けがあったのだとしても、私は驚きませんね」

「仕掛け——といいますと？」

私は無言のまま肩をすくめた。いくらなんでも、そこまで即座には思いつかない。

「爪楊枝に毒を塗ったくらいでは、人を殺すには量が足りないのではありませんか？」

そう質問する刑事の真剣な顔つきに、私は、何が悲しくて自分がそこまで考えてやらなければならぬのかと、まともに相手をするのがばかばかしく感じられてきた。

「表面に塗っただけでは駄目でしょう。でも、爪楊枝というのは案外と太いものですからね、器用な人ならば、ピンバイスなどの精密工具を使って、中をくり抜くことができますよ。爪楊枝の直径が約二ミリとすれば、〇・五ミリの肉厚を残して直径一ミリ、奥行き四センチほどの穴をあけられるでしょう。これがどのくらいの容積かといえ、ざっと計算して、半径の二乗に円周率と奥行きをかけて三〇立方ミリといったところでしょうか。さきほどあなたが言われた毒物でしたら、体重一キロあたり〇・四ミリグラムくらいが致死量ですから、普通の成人女性ならば二〇から二五ミリグラムで死にます。突き刺した衝撃で尖端がこわれるように細工しておけば、中に仕込んだ毒物が食品に吸収されて目的を達することができますよ」

そんなことが本当に可能だろうか？

自分でも半信半疑のまま、その場で頭に浮かんだことを尤もらしく話してやったが、ふと見ると、刑事は頭の中で計算できないらしく、小学生のようにメモ帳に一つ一つ数字を書いて確かめている。

結局、彼は、私の思いつきがたいそう気に入ったらしかった。

「なるほどねえ……それは気がつきませんでした。たしかに、料理に細工をしようとするばアルバイトの目もあって危険ですから、毒楊枝を用意しておいて使わせたのかもしれない。さっそく調べてみますよ。もしもヒデキさんが直接手渡したような事実が判明したら、しめたものです。貴重なアドバイスを感謝いたします！ それでは自分はこれで——」

そう言つて刑事は頭を下げたが、私はもうひと声かけてやりたくなくなった。

「ところで、ずいぶんと警察のお役に立った様子の、例の客——というのは問題のない人なのですか？ 彼には動機がない——それは分かりました。しかし、たとえばアルバイト店員との関係などは？」

「どういう意味でしょうか？」

「アルバイトがその客に一服盛ろうとした料理が、まちがってエミ子に出されてしまった可能性はないでしょうか。ヒデキのことは何とも思っていないが、それでもね、なんていうか……やっぱりね」

刑事は同情するようになずいた。

「どんなに憎くても、お友だちですからね、信じたくない気持ちはお察ししますよ。まあ、その線も、もう少し調べてみましょう。いや、どうもありがとうございます」

刑事が帰つたあとで、私は、手回し式のコーヒーミルでゆっくりと豆を挽きながら、今後の成行きについて思いをめぐらせた。

まちがい殺人の可能性など信じていなかったし、それは刑事も同じなのが火を見るよりも明らかだった。しかし、友情の欠片なりとも示しておかねば、冷たい態度だと不審に思われるではないか。だから、たわ言を承知で少しだけ粘つてみたまでのこと……。

毒を仕込んだ爪楊枝のことも同様だ。刑事がどこまで本気にしたのかは知らないが、裏づけとなる事実など見つかるまい。

それで一体どうなる？

どうということもあるまい。役人というものは、一般人が突拍子もない奇説をと覚えても、そこに何かの企みがあるなどとは決して考えず、無知蒙昧のせいだと決めつけて鼻で笑うことしかできない人種なのだ。

はたしてヒデキは逮捕されるのだろうか？

私は、裁判でどの程度の証拠が必要とされるのかは知らない。自殺したとは思えないから、見知らぬ客やアルバイトには動機がないからという消去法だけで、有罪にできたりするものだろうか？ 分からない。有罪になったら好い気味だと思うが、そんな個人的な感情を別にすれば、むしろ、わが国の司法がそこまで大雑把でないことを願いたいものだ。

だが、いずれにしても店の評判はガタ落ちで、廃業はまぬがれないだろう。

私は、飲み物としてのコーヒーには、さほどこだわりがない。甘すぎるのは苦手だが、そうでなければ、コンビニで買ったコーヒーでも、インスタントコーヒーでも十分に旨いと思う。だが、ていねいに豆を挽いて、フィルターを折って湯を注ぎドリップさせる——その一連の作業をこなすと落ち着いて、この上なく幸せな気分ひたることができるのだ。

やがて最後の一滴が落ちる。この瞬間にはいつも、大きな仕事を成しとげたという充実感に満たされる。

こんなにうまくいくとは思ってもみなかった。

評判が落ちて客足が遠のいてしまえばいい——昨夜は、その程度の思いで毒物を用意したのだ。刑事に話した醤油差しに毒を入れる悪戯こそが、当初の計画だった。毒物の量は

相当なものだが、醤油の一回の使用量を考えれば致死量には足りず、犠牲者は腹痛を起すくらいで済むはずである。しかし、あとで醤油差しを調べれば、致死量の数倍の毒物が検出されるのだ。それでヒデキの店を破壊させるには十分だろう、と計算していた。

気が変わったのは、忌々しい過去の思い出を、さも美しい青春時代の一ページであったかのように話すヒデキの身勝手さに辟易としていた最中、彼が、もうすぐここにエミ子が来るのだと打ち明けた、その瞬間だった。十数年前の、あの絶望と屈辱は、一日たりとも忘れたことはない。彼女が例の官僚と別れた後も、よりを戻そうなどは考えもしなかった。それほどに手ひどい裏切られ方だったのだ。そのエミ子が来る——私が毒物を隠し持っている、この場所へ。私は、何とかエミ子を安全に殺せないものかと考えた。そして、ある一言にヒントを得て、これならばという方法を思いついて実行したのだ。

私がやったのは単純なことだった。

茄子と大根の小鉢を平らげたあと、マグロの山かけには手をつけずに、タップリと毒を混ぜてやった。盛りつけを乱さぬよう、十分に気をつけてだ。

もちろん、それはエミ子が食べる料理ではない。どうしようが勝手な私の料理だ。そして、じきにエミ子がやって来そうな頃合を見計らって、小鉢をそのままにして素知らぬ顔で帰ってきた。

私は職業倫理にもとる不埒な薬剤師で、気づかずに持ち出してしまった不要な薬品の処分に困って、軽はずみにも、目の前の残飯のなかに捨ててしまった。まさか、それがそのまま他の客に出されようなどとは、夢にも思わなかった——というわけなのだ。

毒劇物の廃棄方法について定めた法律があるが、これに違反した場合の罰則は三年以下の懲役若しくは二百万円以下の罰金でしかない。不運にしてバレてしまったとしても、それで憎い女をあの世に送れるのなら安いものだ。

それにしても「串カツにしろ」には笑えた。名無しの客の耳には、そのように聞こえたわけだ。

一時間前に同じ言葉を目にした私は、すぐにその意味を理解できたというのに。どこのどなたか存ぜぬが、迷惑千万、とんだお節介で、刑事が家にまで来て危ないところだった。しかし、そのおかげで目論見どおりに事が運んだことが確認できたのは、感謝しなければなるまい。

一年くらい前にテレビでやっていたが、食品や飲食店の業界用語で、客の食べ残しや、賞味期限を過ぎた食品を捨てずに、再利用することを資源活用——略して「シカツにする」と言うそうだ。もちろん、ヒデキが話しかけた相手はエミ子ではなかったのだ。